

うちまきやくしじょう
内牧薬師堂

大字内牧谷向に東雲山楽応寺という薬師堂がある。

薬師堂所蔵の「武州岩付領内牧村薬師如来略縁起」によると、

仁王第六十四代円融天皇のころ藤原大納言公任という人が子細あつて当所の傍に住みし時天元三年庚辰の年（九八〇年）父母の孝養のため逆修善根の塚を築きし日恵心僧都回国修業のみぎり、導師を依頼、恵心僧都は公任の殊勝な志に感じて本尊として御長六寸の瑠璃光薬師如来の坐像を刻まれ供具を備えて自ら開眼の供養をし安置されたという。

後年に至り、私渋江大和守楽応岩付城主たりし時、かの御仏の靈感深くしてなお数外の不思議を蒙る。よつてこの尊像を敬拝す。しかるに哀しい哉、天元よりの数百年経て堂塔大破し秘仏も塵にまみれており、なげかわしく、昔の建物には及ばないが信心のため草堂を建立して尊像を安置し東雲山楽応寺と命名、末永く靈験の無窮を祈る。

岩付城主 渋江大和守楽応（花押）

同家老 新井長津（花押）

とある。

縁起による内容をきわめると、第六十四代円融天皇の御世（九六九〜九八三年）、後に大納言となつた藤原朝臣公任が東国に下り奥州に向う途中、子細ありとは奥州に入ることが情勢不利であつてこの地にとどまり住んだ（当時薬師堂の付

近には奥州へ通ずる唯一の古道があった。公任は仮住いしながら遠く都に住む父母の幸福を祈るため逆修善根（生きて
いるうちに良いことをする）の塚を、天元三年（九八〇年）築いた。

当時回国修業の途にあつた恵心僧都（天台宗の僧で源信ともいう）にこのことを語り導師を依頼したところ、僧都は薬
師如来の坐像を刻まれ開眼供養をされたと伝えられている。

渋江大和守楽応（岩付城守とあるがこの時代は岩付、渋江、百間郷の地頭職と考えられる）は薬師信仰の厚い人であつ
た。たまたま領内を巡視の際にこの地の薬師堂の荒廃を発見し、秘仏のほりまみれであることを心痛し草堂を結び東雲
山楽応寺と命名したことを後世に伝えるべく、縁起を記したと述べている。

この堂は江戸時代になって元禄十五年岩付安楽寺の大阿闍梨某が百間領寺村の大工中村某に依頼して修築されたことが、
昭和四十八年の改築によつて堂内の支柱に墨書されていたのを発見して明らかになった。

この薬師如来は古くから眼の病に靈験があることで民間信仰の中に伝承されてきている。

縁日は毎月八日その他二月と八月の十六日には特別法要が営まれている。

なお、寅年には尊像の門扉を開いて、お開帳の法要が営まれる。

付近に、新井という姓の家が多いのは渋江氏の家老新井氏の後裔の一族だと思われる。